

前にも書いたが……安珍は、ただの僧ではない……この時代……平民の十、其の一に敵す能わずと恐れられた……奥州の兵を指揮する者としての修行を積んでいるのだ。

騒ぎを聞き付けて僧兵達が集まってきていた……。

安珍は、油断なく……

六尺棒を構えた……。

大勢の中に、

たった一人……

いや、そうではなかった。



「やめろお……」

「打つなら、ワシを打て……」

この者には関係ない……」

いつのまにか癪の男が立ち上がり、

僧兵達と安珍の間に立っていた……。

「来ぬのか……来ぬのなら、ワシの方から抱きつくぞ……」

男は、崩れた手を振り上げ、僧兵達に抱きつくこうとする……。

「ワッ」と叫びながら、僧兵達は思わず逃れようとする……包囲する輪が崩れた……。

安珍は、すばやく、周りの僧兵達の足を六尺棒で薙ぎ払い、転ばせた……。

「来いっ！」

安珍は、叫ぶと、男の手を取り、走る。

樹々の間をくぐり抜けると……中州の白い砂が続いている。

目の前に、荘厳な熊野坐神の社殿が並び立つ……。

男の足がもつれ、社殿の前で、転んだ……。

そして、社殿を見上げ、そのまま、ワーワーと泣き叫び、指の欠けた両の手を合わせる。

安珍も、これでは、そこから動けない……。

「おのれ！」

「よくもやってくれたな！」

追いついた僧兵達の声が怒気を含んでいる……再び、ぐるりと安珍達を囲み……安珍達を打ち据えようとする。

安珍は、癪の男をかばい覆いかぶさると、棒で打たれる衝撃に備えた……。